

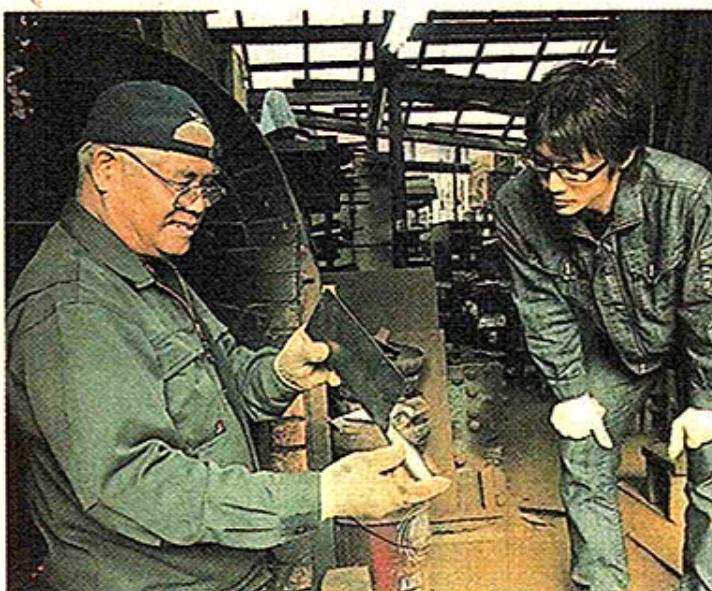
明治期から続く伝統の「博多包丁」の後継者を目指している宮崎春生さん(25)=長崎県五島市=が16日、5年間修業を積んだ福岡市中央区清川の大庭利男さん(72)のかじ工場を1年ぶりに訪れた。大庭さんは大相撲の土俵作りに欠かせない「土俵グワ」を全国でただ一人作る職人。九州場所は1年間使い込まれた「土俵グワ」を修理し、来年に備える、クワにどつても「納めの場所」。大庭さんは、すべての技の未来の繼承者になつてほしいと弟子に温かいまなざしを向けている。

福岡市

## 包丁職人宮崎さん訪問

1年ぶり修業したかじ工場

### 師匠「少しは成長した」



師匠の大庭利男さん(左)に包丁の出来を見てもらう  
宮崎春生さん

# 師弟の距離を縮める切れ味

宮崎さんは2004年、「手に職を付けたい」と3代続く「大庭鍛冶工場」の門をたたいた。何でもさばけるところから「一本包丁」とも呼ばれる

る博多包丁。5年間で基礎を学び、昨年7月、五島市で独立した。経験を積むほどに技術の未熟さを自覚、そのたびに大庭さんに電話で教えを請う。1年ぶりに駆け出しの地に戻り、職人の原点である包丁の出来栄えを見てもらつた宮崎さん。「師匠の仕事を見てできるだけ多くの技を学びたい」

師の技に近づくための試金石になりそうのが、強度と切れ味が求められる土俵グワ。刃先の厚さたったの2ミ。約千度の窯の中に入れて溶かしのばす「熔接流し」という九州独特の製法が用いられている。温度管理には熟練の勘が必要。大庭さんも任されるまで約20年かかった。

弟子の仕事ぶりを見ながら「少しは成長したよ

うだけどまだまだ」と手厳しい大庭さん。宮崎さんは「まずは一人前のかじ屋になるのが目標」。とはいえたが、大庭さんにとっては大庭さんにとって最初で最後の弟子。「私の一存では決められないが、継いでもらえたらうれしいね」と優しくほほ笑んだ。